

バンコク日本人学校における特別支援教育における実践

前泰日教会学校バンコク日本人学校 教諭

茨城県立常陸太田特別支援学校 教諭 来 栖 智 史

キーワード 特別支援教育、バンコク、大規模校

赴任校の概要 (2025年4月現在)

泰日協会学校バンコク日本人学校

THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL

児童生徒数：小学部1,604人 中学部464人

1 はじめに

特別支援学校への採用後、小学校や大学附属特別支援学校での勤務を経て、バンコク日本人学校への赴任が決まった。バンコク日本人学校は、在外教育施設の中で世界最大規模の児童生徒数を誇る学校であり、特別支援学級も設置されている。そのため、これまでの勤務経験を活かせると感じた。

3年間の派遣期間では、1年目が特別支援学級の担任、2年目が特別支援学級主任、3年目が特別支援教育コーディネーターと、毎年異なる役割を経験した。この貴重な3年間で得た学びについて、以下にまとめます。

2 バンコク日本人学校における特別支援教育に関する取り組み

(1) 特別支援学級担任として(1年目)

①バンコク日本人学校の特別支援学級について

派遣1年目である令和4年度、バンコク日本人学校には、小学部のみに特別支援学級（通称「なかよし学級」）が3学級設置されていた。児童数は15名から17名、教員は6名で、全員が特別支援学校教員免許の取得者、または特別支援学級の担任経験者であった。しかし、教室の広さは通常の学級の半分程度であり、環境面での難しさを感じていた。

また、中学部に特別支援学級が設置されていないため、小学部卒業時に日本へ帰国するケースがある。父親の任期との関係から母子で帰国することもあり、在外教育施設ならではの難しさがあった。

②特別支援学級担任として

私は小学部高学年の学級を担当し、私を含め2名の教員で、出入りはあるものの6名程度の児童を指導した。国語や算数は少人数で学習を進め、体育、音楽、図画工作、生活単元学習などは、なかよし学級全体で授業を行った。

1日の流れは、7時前に出勤し、7時から続々と登校する児童を迎える準備から始まる。登校完了後は、国語や算数の少人数授業を3～4時間、全体授業を2時間程度行った。放課後は、曜日ごとに設定された会議や研修などに参加し、16時から1時間おきに出る帰宅バスに乗って退勤した。実態別の少人数で授業を行うことで、個々の児童に合わせた指導が可能であった。

様々な経験を持つ全国各地から派遣された教員や、現地採用の教員と共に、なかよし学級を運営した。

豊富なアイデアや異なる価値観に触れながら作り上げる行事や授業は、私の教員人生において大変貴重な経験となった。

③タイならではの学習

生活単元学習では、タイの季節行事と関連付けた学習を数多く取り入れた。例えば、タイの旧正月である「ソンクラーン（水かけ祭り）」や、水の神様に感謝を捧げる「ロイクラトン」の学習などである。また、「なかよし畑」での学習では、バナナ、パパイヤ、パックブン（空心菜）といった、日本での栽培が難しいタイならではの野菜や果物を育てて収穫した。バンコク日本人学校には、校内の整備をしてくれる多くのタイ人スタッフがおり、畑の手入れなどでも協力して取り組むことができた。

さらに、なかよし学級では「APCD（アジア太平洋障害者センター）」との交流も行っている。APCDは、タイ政府と日本政府の支援により設立された国際的なセンターで、アジア太平洋地域の障害者のエンパワーメントとバリアフリー化を目指している。年に1度、校外学習としてAPCDを訪問し、パン作り体験などをさせていただいた。在外教育施設でありながら、このような国際的な機関との交流機会があることは、大変貴重であった。

（2）なかよし学級主任としての取り組み（2年目）

①なかよし学級の運営

令和5年度は小学部3学級児童17名、教師6名でスタートした。授業に関わることとしては、学級担任を兼任しなかったため、各クラスの補助や生活単元学習、体育、音楽、図画工作、自立活動などの授業を行い、T2以下としての役割が多かった。また、交流学級との時間割調整、なかよし学級入級希望者の面談や見学の調整などを行った。

②なかよし学級についての理解促進

なかよし学級主任として、全児童へのなかよし学級の理解促進が、重要な取り組みの1つだった。バンコク日本人学校は、児童生徒や教員の入れ替わりが多いため、なかよし学級がどのような学級であるかを定期的に説明する必要があると感じていた。

説明は、児童、教員、保護者向けに行った。児童向けには、小学部1年生の全クラスを訪問し、なかよし学級について説明するとともに、児童からの質問にも答えた。小学部2年生以上には、学年集会などで説明を実施した。丁寧な説明を心掛けることで、なかよし学級に在籍する児童が安心して学校生活を送り、また他の児童にとっても多様性を認め合う心を育む機会となることのきっかけになればと考えた。

③中学部特別支援学級の開設

前述の通り、バンコク日本人学校には中学部に特別支援学級が設置されていなかった。そのため、小学部を卒業後、やむなく母子で日本へ帰国するケースも少なくなかった。こうした背景や、日本における特別支援教育の推進という流れを受け、令和6年度の中学部特別支援学級設置に向けた準備を進めた。具体的には、教育課程の編成、時間割や年間指導計画の作成、教材の準備、保護者や教職員への説明会などを実施した。

④特別支援教育進路説明会の実施

バンコクにおいては、特別な配慮を要する児童生徒の進路の情報が日本と比べて圧倒的に少ない現状があったため、通常の学級の保護者も含めて希望者に対して、特別支援教育進路説明会を実施した。特別な配慮を要する場合、都道府県による違いや療育手帳の有無などにより、進路や就労の選択肢が多い

ため、早い段階から情報を得て、保護者が子どもの将来の自立に向けて見通しをもったり、考えたりできることは、意味のあることだと感じている。

(3) 特別支援教育コーディネーターとしての取り組み(3年目)

①特別支援教育についての職員研修や助言

小学部のみで80学級程度ある大規模校であるため、学校として特別支援教育を充実させていくことは大切な業務である。バンコク日本人学校には、毎年20名～30名程度の学校での勤務経験のない教員が赴任してくるため、そのような教員に対して研修を実施した。その中の研修の1つとして特別支援教育に関する研修を行った。その他、全職員向けの職員研修会を夏季休業中と冬季休業中に行った。具体的な研修の内容としては「合理的配慮」「教育のユニバーサルデザイン」「なかよし学級についての説明」などを行い、全職員の特別支援教育に理解や考え方方が深まるように努めた。また、通常の学級の中に在籍している個別の配慮が必要な児童生徒に対しての支援方法について、学級担任や主任の相談にのり、必要に応じてケース会議などを行った。

②就学に関する相談

バンコク日本人学校は在外教育施設であるということから、日本において教育委員会などが行っている就学相談がなかった。そのため編入学を検討している児童生徒とその保護者との面談を行い、適切な就学の場について検討した。バンコク日本人学校には、特別支援学級が設置(令和6年度は小学部4学級、中学部1学級)しているが、配置できる教員の数が決まっていることや、日本ではある特別支援教育支援員がないことから、個に応じた指導が難しい部分もあり、特別な配慮を要する児童生徒を全て受け入れることが難しい現状にある。メールでのやり取り、オンラインや対面での面談を重ね、適切な就学の場について検討した。特別支援教育に長年携わってきた私にとって、必要とする全ての児童生徒の受け入れをしたい気持ちが強くあったが、人的資源や医療・福祉面でのサポートなどを考慮したときに、受け入れが難しいケースもあり心が痛んだ。充実した3年間の派遣期間の中で、一番辛い仕事であった。ただ、受け入れの環境面が整っていない状態で、編入学をしたときに「学習についていけない、学校に行くのが辛い…」など一番苦労してしまうのは、児童生徒本人と保護者となってしまうことを懸念し、苦渋の決断をせざるを得ないときがあった。

③編入学に関する対応

一年間に3から4分の1の児童生徒が入れ替わる学校であるため、毎学期数百人の児童生徒が編入学する。そのためバンコク日本人学校において、編入学の対応は重要である。令和5年度からは編入学を希望する保護者に対して、令和6年度からは在籍する園や小学校中学校に対して、学校生活に関するアンケートを実施した。編入学希望者がたくさんいるため、アンケートの配布や分析の数も多かったが、アンケート結果を基に学級編成をしたり、必要であると考える配慮について検討したり、場合によっては就学相談なども行うことで、個別の配慮が必要な児童生徒が特定の学級に偏ることを防ぎ、安定した学級・学年経営をするための基盤を整えることができた。

④通級指導教室

通級指導教室は、週1時間を基本にして、個別や小集団によるソーシャルスキルトレーニング(SST)やLD傾向のある児童に対しての学習支援を行った。私は小学部の児童を15名程度担当した。その他、スクールカウンセラーと中学部担当が数名のSSTを実施していた。日本の通級指導教室と比べると、確保できる

時数が十分でない現状があった。令和7年度より、通級専属の教員を配置することで、指導支援体制の充実が期待される。

⑤特別支援に関わる教員との連携

バンコク日本人学校は、(1) 通常の学級内における支援 (2) なかよし学級における支援 (3) 日本語教室における支援 (4) 通級指導における支援 (5) スクールカウンセラーにおける支援 (6) ふれあいルームにおける支援(不登校傾向にある児童生徒のための教室)の6つの柱で特別支援教育を実施している。教室巡回による担任補助や校内支援体制の検討、特別支援教育の情報発信などを行った。

3 最後に

バンコク日本人学校は、在外教育施設においては特別支援学級を設置している数少ない学校の1つではあるが、2000名を超える児童生徒の数に比べて、数が足りていない印象があった。しかし、近年の特別支援教育の充実や個に応じた支援を大切にする考えが高まっていることもあり、令和4年度の3学級から令和6年度5学級（小学部4学級、中学部1学級）と学級数を増設してきた。さらに令和7年度からは小学部と中学部の学級数を1学級ずつ増設するなどさらなる充実を図ることになっている。このことは、在外教育施設においても、日本と同等の特別支援教育を行うことが求められていることの表れだと感じている。特別支援学級を増やすということが特別支援教育の充実につながることだとは言いきれないが、少なくとも個別の支援を受けることができた児童生徒にとっては、救われた部分はあったと信じている。一方で、児童生徒の将来を考えたときに、教育・医療・福祉などが充実している日本で手厚い支援を受けた方が良い場合も少なからずあった。その場合、編入学できなかったり帰国を余儀なくされたりすることもあり胸が痛んだ。今後、在外教育施設においても、日本と同等の教育・医療・福祉のサービスを受けることができるようになり、特別な配慮を要する子どもたちやその家族が、安心して楽しく生活できるようになればと心から思う。私のバンコク日本人学校での3年間が、少しでもその力になっていれば幸いである。

最後に、私の実践記録を読んだ誰かが、在外教育施設の特別支援教育について興味を抱き、海外で暮らす日本人の教育の充実のために尽力するきっかけになれば嬉しく思う。